

大蛇を題材にしたふすま絵の構想を練る山藤孝哲さん



東京都新宿区神楽坂にある日本料理店「神楽坂久露葉亭」に、石見地方をモチーフにした空間が誕生する。石見神楽と神楽坂が「神楽」の名前がつながる縁で、県西部の石州瓦製造会社などが企画。石見産の食器や小物をそろえるほか、神楽を題材にした絵画も店内で展示する。

「神楽」キーワードにコラボ

「石見」で料理店演出

久露葉亭を経営する暗闇坂宮下（東京都港区）の斉藤道明総料理長が、昨年11月に浜田市で開かれた「地食甲子園」の審査委員長を務めたことから、石州瓦製造の亀谷竊業（浜田市長沢町）との間で、久露葉亭の改装に合わせたコラボレーションの計画が浮上。デザイン事務所「SUKIIMO」

東京・神楽坂

NO（江津市江津町）と、江津市波子町を拠点に活動する画家の山藤孝哲さん（35）の参加も決まった。

このうち、山藤さんは7日に上京し、約1週間かけて、久露葉亭の2階にあるふすま6枚（高さ約1・8m、横計5・4m）に、石見神楽の人気演目「大蛇」を題材にした墨絵を描く。神楽の持つ静と動の動きを

県西部の画家、瓦会社など企画 ふすま絵や小物で

表現した作品にする構想で「100年後も残るような普遍的な作品を作りたい」と意気込んでいる。

瓦素材の食器などを納品する亀谷竊業の亀谷典生社長（44）は「（神楽坂は）外国人の観光客も多く、石見に興味を持ってもらい、足を運んでほしい」と期待。石州和紙を使った商品などを納める予定のSUKIIMOの平下茂親代表（33）は「石見の人が、自分たちのものづくりに誇りを持つきっかけにしたい」と思いを語る。

久露葉亭の改装は20日までに終了予定。暗闇坂宮下業務企画室の鈴木修室長（58）は「神楽をキーワードに良い縁が繋がった。石見の雰囲気をも、多くのお客さまに楽しんでもらいたい」と話した。